



序 文

関西大学レスリング部OB会

会 長 山 本 雅 之

関西大学レスリング部創立30周年の式典と、部誌の発刊に当りまして関係各位の皆様方と共にこの慶びを分かちたいと存じます。

思い起こしますれば、あの長かった悪夢の様な戦争が終りを告げ、私も特攻隊より復員し関大に入って2年余、人々の心は目標を失って揺れ動いて混乱と荒廃の毎日でありました。

丁度その時、故小田原徳善先生（当時大阪市立高校教諭、関大レスリング部名誉顧問）より関大にレスリング部を創設したらどうかとの話が持ち込まれました。当時私は拳法部に入っておりまして初段の免許を取った時でもあり正直にいて驚きと戸惑い感が先に立ちました。何となれば私は西洋の格闘技に理解もなく、日本の武士道にのみ人生の活路ありと考えていたのです。それにレスリングというスポーツはどの様な事をするのか全く見当がつかなかったからであります。幸いな事に私の中学時代の後輩に相撲部や柔道部出身の者が6、7人おりましたのでこの話を持ちかけました所、皆、快よく創部に賛同してくれましたので此処に宇賀照夫、古沢、安川、友田、東条、田中、木村勝の諸氏と共に関西大学レスリング部が昭和23年春に歴史的な発足に踏み出したのであります。とは申しましても、何分誰も経験がないものですから連日故小田原先生に相談し、時には東京の八田先生（現日本レスリング協会々長）を青山の御自宅に訪問してレスリングの基礎知識等を教わり、薄氷を踏む様な気持ちで少数の部員と共に校庭の芝生の上で海水用のパンツで練習が始まったのですから今から考えると、大変愉快な姿でした。芝生の上で練習するのですから毎日怪我人が出たのも今から思いますとよく辛抱して頑張ったの一語に尽きると思います。

当時は何処の家庭でも今日と違い経済状況が非常に苦しかったものですから学業と練習に専念する事が大部分の部員には非常に難かしく半分はアルバイト等して学費の調達に懸命でその費用の一部を持ち寄って駐留米軍のテントを練習用マットに購入した時の喜び等、未だに忘れる事が出来ません。

その頃明治大学OBの村田恒太郎先生を初代監督として迎え、押立、下村、木村晴、黒木、宇田、梶原と各クラスに陣容が整い、村田監督の並々なぬ御苦労と部員の精励の結果、汗と涙で勝ち取った初の関西学生リーグ戦の優勝の喜びが30年の長い歴史の今も私の脳裡に判然と焼き付いております。

校内体育部においてはAクラスにランクされ関大レスリング部の黄金時代を迎えたのであります。

世界各国との交流試合も非常に活発になり我が関西大学レスリング部からも、市口君のオリンピック金メダルや、幾多の国際選手を数多く輩出する事が出来ました事を非常に嬉しく思っております。これもひとえに選手はもとより関係各位の並々なぬ御協力と努力の賜であると考え深く感謝する所

であります。今後の私見を述べさせて頂くならば関大の学歌にもあります様に「人の親和と協調」を失う事なくスタンドプレーを慎んで相互に初心の時の精神に立ち返って現役の部員共々、部の発展の為に精励する事が出来ますならば必ずや、今後多数の現役選手の入部を見る事が出来、益々強力なわが関西大学レスリング部の輝やかなしい歴史の進展を観る事が出来得るものと確信致しております。

最後に創部に当り多大の労苦と功績を残され乍ら今日の喜びを共に分かち合う事なく他界された、小田原徳善先生、木村篤一後援会長、安川健次君やその後急逝された村山栄治君の御冥福を心よりお祈り申し上げます。